Abstract

ヴェルヌから包天笑まで*

『鉄世界』の重訳史

陳 宏 淑
✉ redyamchen@gmail.com

Bao Tianxiao (1876-1973) is often discussed as a translator and as a sensation novel writer. Regarding his translations, researchers have mostly focused on his education fiction. However, he also translated several science fiction (SF) novels in his early career. In fact, the first novel he translated was *Iron World*, an SF novel indirectly translated from Jules Verne's *Les Cinq Cents Millions de la Bégum*. *Iron World* is the focus of this study for several reasons. It is the first book that Bao translated independently, without help from his colleague, and marks the start of his SF translations, which led to him writing his own SF stories a few years later. Next, the source text of his translation is a Japanese version of the novel, which initiated him into the world of Japanese novels in which he started to search for materials to translate. Finally, the details of this relay process have remained unknown, and after my investigation of the publication information and careful comparison of several texts, I have verified that Bao's Chinese *Iron World* was translated from the Japanese *Iron World* by Morita Shiken (1861-1897) and that the Japanese rendition was in turn derived from *The Begum's Fortune*, W. H. G. Kingston's direct English translation of Verne's French original. This relay process became the first model for Bao's relay translation pattern. Investigating the journey of the text from Europe to America and then to Asia, as well as his strategies and influences, would help to further the studies on Bao Tianxiao and to attract more researchers to value his contribution to SF translation in late Qing China.

Keywords Bao Tianxiao(包天笑), science fiction(科学小説), translation history (翻訳史), *Iron World*(鉄世界), Jules Verne(ジュール・ヴェルヌ)

* 本研究は台湾行政院科技部の科研費(MOST 103-2410-H-845-005-MY3)の助成を受けたものです。

1 はじめに

包天笑(1876-1973)は、清朝末期から民国初期にかけての著名な翻訳家で、多くのジャンルの小説を翻訳するなど訳本の数も極めて多い[1]。中でも特によく知られているのが商務印書館発行『教育雑誌』向けに翻訳した教育小説である。特に教育部から賞を受けた「教育三記」[2]は、包の翻訳の代表作と称すべきものであろう。だが実際には、包は教育小説の翻訳を手がけるより以前から、多くのSF小説、当時でいうところの「科学小説」を翻訳していたのである。ただ、これまで先行研究での関心は教育小説の翻訳と鴛鴦蝴蝶小説の創作にのみ寄せられ、SF小説の翻訳は見過ごされがちであった。だが実際のところ、清朝後期において科学小説の翻訳は非常に盛んで、ヴェルヌ(Jules Gabriel Verne、1828-1905)は特に人気があり、包天笑もそのブームの影響を受けていたのである。陳明哲は、1900年~1919年(五四運動)の時期に中国語訳されたヴェルヌの著作は計19種あり、このうち包天笑の訳は『鉄世界』(1903)、『秘密使者』(1904)、『無名之英雄』(1904)、『一捻紅』(1906)の4種で、この時期、ヴェルヌの作品を最も多く訳した翻訳者の1人だと言えると指摘している[3]。包天笑が自身のみで完成させた1冊目の翻訳小説は、ヴェルヌの作品を原作とした科学小説『鉄世界』であり、その後彼は多くのSF小説の翻訳を手がけ、後にはSF小説の創作も開始するようになる。ここから、この翻訳者がSF小説の翻訳にかなり力を入れていることは明白であり、晩清文人の翻訳者である包天笑研究において、初期の科学小説の翻訳は決して見過ごしてはならないものだと考えられる。

包天笑の初の翻訳作品である『鉄世界』は、その特異な意味と価値を有するものである。その理由として、まず、これが包天笑が自力で完成させた翻訳作品であり、楊紫麟との共訳による包天笑の初の翻訳作品とされる『迦因小伝』[4]とは異なり、『鉄世界』こそが真の意味で、包自身が原文を解読し訳文を作り上げた翻訳作品だという点である。第二に、この翻訳作品のソーステクストは日本語訳本で、『迦因小伝』のソーステクストは英訳本と異なっている点である。いわば『鉄世界』は、包天笑が日本語をソーステクストとした最初の試みなのである。第三には、これは筆者の調査によって明らかになったことだが、『鉄世界』はまずヴェルヌのフランス語の原作がキングストン(William Henry Giles Kingston、1814-1880)によって英訳され、森田思軒(森田文藏、1861-1897)がこの

---

1 「1901年、共訳した『迦因小伝』から1916年まで、出版された翻訳小説はおよそ36~37種(共訳を含む)にのぼる。林琴南を除き、その翻訳数の多さは右に出る者がいない。」陳平原『二十世紀中国小説史 · 第一巻』(北京：北京大学出版社，1997年)，p.61.

2 この三記とは『馨児就学記』(1910年)、『埋石棄石記』(1912年)、『苦児流浪記』(1915年)のことである。

3 陳明哲『凡爾納科幻小説中文訳本研究』(国立台湾師範大学翻訳研究所，修士論文，2006)，p.26.

4 包天笑の翻訳第一作は『迦因小伝』で、この本はイギリスのヴィクトリア時代の作家ハガード(Henry Rider Haggard，1856-1925)の作品である。翻訳の方法としてはまず楊紫麟が口述し、包天笑がそれを原稿に書き起こすというものだったが、その後は楊紫驎が下訳をし、包天笑が訳文を見直すようになった。(包天笑『釧影樓回憶録(上)』(台北：龍文出版社，1990)，pp.204-205)

英訳を日本語訳し、さらに包天笑が森田思軒の日本語訳を中国語訳したという点である。こうした幾層もの重訳がなされるルートは、その後包天笑の重訳モデルの雛形となるものである。このため、包天笑のSF小説の翻訳を考察するには、『鉄世界』が重要な起点となることは疑うべくもない。そこで本稿では先行研究でなされていなかった部分を埋めるべく、包天笑の初の科学小説の翻訳作品『鉄世界』を取り上げ、いまだ明らかにされていない翻訳の足取りを明らかに、テクストの細読[5]を通して、包天笑の科学小説翻訳の特色を分析し、包天笑のSF小説翻訳史構築の足掛かりとしたい。

2 先行研究について

本稿が考察する『鉄世界』の重訳史は、原作者のヴェルヌ、英訳者のキングストン、日本語翻訳者の森田思軒、そして中国語翻訳者の包天笑が関係してくる。いずれも著作、翻訳作品とも数多い作家・翻訳者であるため、各々の個人や作品に関する文献資料は実に多いが、『鉄世界』に直接関連した研究は数えるほどしかない。ヴェルヌについては『鉄世界』の原作であるフランス語の作品『*Les Cinq Cents Millions de la Bégum*』(フランス語の題名を訳すと「貴婦人の五億」、以下『*Les Cinq Cents Millions*』)はそれほど人気もなく[6]、ヴェルヌの重要な作品とは見なされておらず、ヴェルヌの諸作品を論じる際に軽く触れられる程度である。例えば、ティモシー・アンウィン(Timothy Unwin)が著した『*Jules Verne：Journeys in Writing*』のように、多くがヴェルヌ文学の全体に注目しており、個別の作品はただその論の例として挙げられるのみである。その中で『*Les Cinq Cents Millions*』は言葉に滅亡の力があることの例として取り上げられるだけとなっている。そこでは、作品の中の悪人Schultzeが手紙でFrance-Villeという町を滅ぼすよう命令しており、これによってヴェルヌは読者にエクリチュールそのものが人々の運命を決定できることを伝えようとしたのだ、と述べられている[7]。

『*Les Cinq Cents Millions*』を取り上げ論じた研究は管見では2つのみで、雑誌論文「The Catastrophic Imaginary of the Paris Commune in Jules Verne's *Les 500 Millions de la Bégum*」[8]と「*The Begum's Millions*」の最新英訳版の紹介[9]がそれである。このうち

---

5 この細読とは、ニュークリティシズムのいう精読(close reading)とはいくぶん異なる。本論が強調するテクストの細読とは、いくつかの段落や語彙に限るものではなく、逆にテクスト全体をくまなく探し、同時に読解の際にはソーステクストとターゲットテクストの比較を当然行い、これにより翻訳者の操作を観察するものである。このため、観察した結果は当然ながら翻訳者が当時生きていた社会や歴史的状況と深く結びついている。

6 彼の1879年以前の作品に比べると、第一版は平均して35,000~50,000冊の販売部数があったが、この小説は17,000冊しか売れなかった。Charles-Noël Martin, *La Vie et l'oeuvre de Jules Verne* (Paris：Michel de L'Ormeraie, 1978), 280-281.

7 Timothy Unwin, *Jules Verne：Journeys in Writing*(Liverpool, UK：Liverpool University Press, 2005), 93-94.

8 D. Lee, "The Catastrophic Imaginary of the Paris Commune in Jules Verne's Les 500 Millions de la

雑誌論文では、ヴェルヌのこの作品は普仏戦争におけるフランスの惨敗と1871年のパリ・コミューンの影響が織り込まれており、フランスの当時の歴史的コンテクストと密接につながっていることが明らかだと指摘している。また最新英訳版では、詳細な紹介と注釈も掲載されており、この本の出版の前後関係や当時の社会的コンテクストが読者に知らされている。さらに適格な分析もなされており、この作品がヴェルヌのそれまでの楽観的な態度を変え始める転換点となった1冊だと述べられている。このほか、紹介や注釈を書いたピーター・シュルマン(Peter Schulman)は、その前に出版された2冊の英訳本の翻訳における不適切な部分を指摘しており、これによって読者がより深くヴェルヌの原著に触れることができる。彼は、段落ごとに比較をし、以前の英語翻訳の誤訳部分を明らかにし[10]、これらの誤訳の中にはヴェルヌの原作の意味を完全に捻じ曲げてしまっているものもあると強調する[11]。アーサー・エヴァンズ(Arthur B. Evans)もこうした見方をしており、ニューヨークのMunro出版社の英訳本は実にひどい翻訳だとしている[12]。

翻訳者のキングストンの資料については、多くが百科事典で記載されている経歴程度しかなく、その中では『*Oxford Dictionary of National Biography*』が比較的詳細に記されている。このほか、19世紀のイギリス少年文学を論じる中で、冒険小説作家としてキングストンが取り上げられている。例えば、Patric A. Dunaeの *Boy's Literature and the Idea of Empire, 1870-1914*[13]である。だがキングストンに関する記述の多くは、その少年冒険小説作家の部分に注目したもので、翻訳についてはほとんど触れられていない。その英訳本『*The Begum's Fortune*』は前述のヴェルヌ研究者にあまり質のいいものではないと指摘されており、キングストンが翻訳したもう1冊のヴェルヌ作品の英訳本『*The Mysterious Island*』も大幅に書き換えられているために、イギリスの帝国主義を批判する原作の精神が失われていると批判されている[14]。このように先行研究ですでに英訳本とフランス語原作の比較がなされているため、本稿ではキングストンの英訳本の問題については述べず、日本語訳と中国語訳の比較分析に重点を置きたい。

Bégum", *Neophilologus* 90.4 (Oct. 2006), 535-553.

9 Peter Schulman, "Introduction", *The Begum's Millions*. by Jules Verne, trans. Standford L. Luce, ed. Arthur B. Evans (Middletown, CT : Wesleyan University Press, 2005), xiii-xxxix.

10 ヴェルヌの他の作品の英訳に対する低評価は、William ButcherとArthur Evansの文章でも見られる。William Butcher, "Journey to the Centre of the Text : On Translating Verne", *Babel* 40.3 (Jan. 1994), 131-136. Arthur B. Evans, "Jules Verne's English Translations", *Science Fiction Studies* 32.1 (Mar. 2005), 80-104. Arthur B. Evans, "A bibliography of Jules Verne's English Translations", *Science Fiction Studies* 32.1 (Mar. 2005), 105-141.

11 Peter Schulman, "A Note on the Translation", *The Begum's Millions*. by Jules Verne, trans. Standford L. Luce, ed. Arthur B. Evans (Middletown, CT : Wesleyan University Press, 2005), ix-x.

12 Arthur B. Evans, "A bibliography of Jules Verne's English Translations", 124.

13 Patric A. Dunae, "Boy's Literature and the Idea of Empire, 1870-1914", *Victorian Studies* 24.1(Autumn, 1980), 105-121.

14 Walter James Miller : "As Verne Smiles", *Verniana* 1(2008-2009) : 3. 〈http://www.verniana.org〉 (6 Sept. 2014).

日本語訳の『鉄世界』は単行本として出版されているが、出版前は「仏曼二学士の譚」という題名で『郵便報知新聞』に発表された。日本語訳『鉄世界』あるいは「仏曼二学士の譚」の研究は、管見では藤元直樹の雑誌論文「明治ヴェルヌ評判記 —『鉄世界』編」[15]のみである。この論文は主に『鉄世界』が出版された後の各新聞での広告や書評を整理したもので、記事の内容の多くが物語のあらすじで森田思軒の翻訳に関する評論も数行あると指摘する。ただ森田思軒に関する研究は多く、特にその翻訳文体は注目されている。明治20~30年(1887~1897)は森田思軒の翻訳稼業の全盛期であり、明治翻訳史では「周密文」[16]で著名であり、「翻訳王」という呼び名もあったほどである。このため多くの研究、例えば中里理子「森田思軒の周密文体の特徴」[17]や高橋修「森田思軒訳≪探偵ユーベル≫の終り」[18]などのように、その周密文を中心に論じられている。だが、これらの研究が論じる周密文体の表現は明治中期以降現れたもので、初期の翻訳である『鉄世界』の訳文にはまだ見られない。1887年、森田思軒の翻訳稼業はまだ始まったばかりで、漢七欧三の文体[19]もまだ創出しておらず、その文体はいまだ明治前期の漢文調の影響を色濃く受けたものである。

一方、包天笑の研究は概論的なものが多く、ある特定のジャンルでの包天笑の翻訳表現での詳細な分析は見られない。王晶晶の博士論文『新旧之間 — 包天笑的文学創作與文学活動研究』[20]はその一例である。この論文は主に包天笑の文学創作と新聞の編集活動を論じており、第二章ではその初期の翻訳を論じてはいるものの、そこに挙げられた例には包天笑が翻訳した科学小説は見当たらない。包天笑の翻訳作品を扱った他の論文でも、多くは包天笑の教育小説の翻訳が中心であり、文中に挙げられる例も多くが『馨児就学記』に限られており、科学小説の翻訳は見過ごされているのである。陳明哲の修士論文『凡爾納科学小説中文訳本研究 — 以≪地底旅行≫為例』[21]は、中国におけるヴェルヌ小説の翻訳状況を論じたもので、包天笑が翻訳したヴェルヌの数冊の小説も取り上げられている。しかし、この論文の主な研究対象はあくまで魯迅が翻訳した『地底旅行』であるため、包天笑の科学小説については深くは述べられていないのである。このほか、先行研究では晩清の科学小説の翻訳の系譜を論じる中で、多くの翻訳者や作家が挙げられ、その中に包天笑の名も見出せるものの、詳細には論じられていない。晩清の小説の

15 藤元直樹「明治ヴェルヌ評判記 —『鉄世界』編」(『Excelsior!』第4期, 2010.4), pp.111-125.

16 柳田泉『明治初期の飜譯文学』(東京：松柏館, 1935), p.191.

17 中里理子「森田思軒の周密文体の特徴 —「探偵ユーベル」に見る文章表現上の特色」(『学校法人佐藤栄学園埼玉短期大学紀要』第2号, 1993.3), pp.69-77.

18 高橋修「森田思軒訳『探偵ユーベル』の終り —「探偵」小説というあり方をめぐって」(『上智大学国文学論集』第38号, 2005.1), pp.1-17.

19 徳富蘇峰編『思軒全集巻壹』の序では、思軒の文体を「漢七欧三、若し之を顛倒せば、恐らくは今日の思軒にあらじ」としている。高橋修「森田思軒訳『探偵ユーベル』の終り —「探偵」小説というあり方をめぐって」p.7. より。

20 王晶晶『新旧之間 — 包天笑的文学創作與文学活動研究』(上海師範大学人文與伝播学院中国現當代文学,博士論文, 2012).

21 陳明哲『凡爾納科幻小説中文訳本研究』, 2006.

テーマについては、概括的な研究は少なくないが、包天笑の翻訳作品に関しては一言、二言のコメントが多く、テクストの細読によって、その科学小説の翻訳を論じたものは見当たらないのである。だが、包天笑という晩清民初の翻訳者を深く理解するためには、彼が翻訳業に従事しはじめた頃、つまり教育小説の翻訳に携わる前にいかに科学小説を読み取り、どのようなストラテジーを用いていたのか、どのような姿勢で翻訳に取り組んでいたのかという点から始め、その後の変化をも観察することが必要なのではないだろうか。

3 重訳の経緯

後に包天笑が「撰稿」と称し、自分が作者と自称して翻訳した教育小説と比べると、『鉄世界』はソーステクストに対して責任感を持って臨んでいる様子が伺える。包は「訳余贅言」で、「僕少肄法文，然不能譯書，此書由日本森田思軒轉譯而來，然竊謂於原意不走一絲，可自信也。（私はいくらかフランス語を学んだが、書物を訳すほどではない。この書は日本の森田思軒の訳文を重訳したものだが、原意をまったく損なっていないことには自信がある。）」[22]と述べている。筆者が調べてみたところ、同じ書名である日本語訳『鉄世界』は森田思軒が「仏曼二学士の譚」と題し、1887年3月26日から5月10日まで[23]、東京の『郵便報知新聞』のコラム「嘉坡通信報知叢談」に掲載され、同年9月『鉄世界』という書名で単行本として出版されたことがわかった。思軒は単行本の序で、この本が「ジュールヴェルーヌ氏」の「ヂ、ベガムス、フォルテュン」から訳したとしているが、このカタカナ表記の音から見れば、それがフランス語が原文の書名でないことは明らかである。さらに森田思軒が英文学を学んだ背景を合わせて考えれば[24]、英訳本からの重訳の可能性が高いと見てよいのではないだろうか。

森田思軒が1887年に日本語訳を上梓する以前にあった英訳本は2種類である。1つは1879年にロンドンで出版されたもので、出版社はSampson Low、書名は『*The Begum's Fortune*』[25]、翻訳者はキングストンである。もう1冊は1879年にニューヨークで出版されたもので、出版社はGeorge Munro、『*The 500 Millions of the Begum*』、翻訳者は不

22 包天笑「訳余贅言」『鉄世界』（上海：文明書局，1908），p.1.

23 桒原丈和「「嘉坡通信報知叢談 ― 論メディアとしての小説」（『文学・芸術・文化』第21巻第1号，2009.9），p.20.

24 森田思軒は13歳で慶応義塾大学大阪分校に入学し英語を学び始めた。柳田泉『明治初期の飜譯文学』，p.503.

25 本稿では、1879年ロンドン版が入手できず、同年フィラデルフィアで出版されたバージョンしか発見できなかった。だが、翻訳者はW. H. G. Kingstonで、印刷地もやはりロンドンであり、頁数も同じく272頁であるため、内容もロンドン版と同じであろうと推定した。Norman Wolcottの資料によると、フィラデルフィアJ. B. Lippincott出版社が発行したバージョンは、ロンドンのSampson Low出版社が発行したバージョンのコピーであるという。Norman Wolcott, "The Victorian Translators of Verne：Mercier to Metcalfe." (Lecture, the Jules Verne Mondial, March, 2005). 〈http://www.ibiblio.org/pub/docs/books/sherwood/The%20Victorian%20Translators%20of%20Verne.htm〉(27 Aug 2015).

明である[26]。崔瑞娟は、日本語訳のソーステクストは『*The Begum's Fortune*』だと推論しているが[27]、これは書名からのみの判断であり、詳細な検討は行われていない。森田思軒が挙げたカタカナの書名から考えれば、確かにロンドン版に近く、筆者がさらにテクストの比較、人名の比較をしたところ、日本語訳がロンドン版からのものだということがほぼ確定した。例えば日本語訳では、「マクス」という人物名が出てくるが、ロンドン版では同一人物が「Max」とされ、ニューヨーク版ではこれが「Mureel」[28]となっている。もう1人の重要な登場人物に医学博士がいるが、日本語訳ではこの人物の名字は「佐善」で名前は「法朗宋」、カタカナ表記ではフランソアとなっており、その発音はニューヨーク版の「Francis」よりもロンドン版の「François」に近い。これらから日本語版はロンドン版を訳したものと考えて間違いないだろう。森田思軒は1885年にヨーロッパを旅しており[29]、同年12月にはイギリスを訪れ、1886年夏にアメリカを回って日本に戻り、1887年にこの訳本を出している。このため、イギリス旅行の際にロンドン版を手に入れたか、あるいはアメリカを経由した際にロンドン版と書名も内容も同じフィラデルフィア版を購入した可能性が高い[30]。このため『鉄世界』の重訳のルートは、フランス(ヴェルヌ)→イギリス(W. H. G. Kingston)→日本(森田思軒)→中国(包天笑)ということになる。

1870年、普仏戦争の後に書かれたヴェルヌのこの作品は、ドイツに対する敵意に満ちており、勧善懲悪のストーリーで、敗戦したフランスを鼓舞する意味合いが見出せる。また、この作品以前、ヴェルヌは作中で現代文明と科学の進歩に対し前向きな姿勢を見せていたが、この作品からはいわゆる「進歩」に対して明らかに悲観的な見方を見せ始めるのである。物語の中の2つの都市は、まるで一方は理想のユートピア、もう一方は邪悪なディストピアのようだが、これに対しPeter Schulmanは、たとえユートピアのほうだとしても、現代的な進歩でありながら、実際には制限と執着に満ちた社会であると論じている[31]。注目すべきなのは、この作品が完全にヴェルヌによる創作だというわけではないという点である[32]。原書は『*L'Héritage de Langévol*』であり、最初の作者はPaschal Grousettという革命分子なのである。この最初の作者は、何度も収監され、そ

---

26 Peter Schulmanは、2005年の新訳本でそれまでのバージョンについて述べており、同じくこの2つのバージョンしか挙げていない。Peter Schulman, "A Note on the Translation", ix.

27 崔瑞娟『中韓近代科学小説比較研究－以凡爾納的『海底旅行』和『鉄世界』為中心』(山東大学韓国学院亞非語言文学所, 修士論文, 2012), p.38.

28 フランス語の原作の主人公の名前はMarcelで、ニューヨーク版はMureelとなっているが、これは単語の形が似ていることによるかもしれない。

29 森田思軒はその「船上日記」で、船上の無聊をまぎらわすため、多くの西洋小説を読んだとしている。(柳田泉『明治初期の飜譯文学』), p.524.

30 森田思軒は旅行中、英語の小説に熱中し、『消夏随筆』で自分は矢野龍渓が切符を買う予定だった金でアップルトン出版会社(D. Appleton & Company)で20冊余りの文学書を購入してしまったと記している。(柳田泉『明治初期の飜譯文学』), p.524.

31 Peter Schulman, "Introduction.", xv.

32 Timothy Unwin, *Jules Verne : Journeys in Writing*, 189.

の後アメリカへ逃亡し、さらにロンドンへと移り、ロンドンでこの作品を完成させ、1,500フランで出版商のPierre-Jules Hetzel (1814-1886)に売却した。Hetzelはヴェルヌならこの傷物の作品を人気作に変えられると考え[33]、ヴェルヌに書き換えを求めた。つまり、ヴェルヌは実際にはリライターであって、真の作者ではないのである。

偶然にも、英語版翻訳者のキングストンもまた真の翻訳者ではない。前述したように、キングストンは主に作家として名をなしており、初期は歴史小説や紀行文を執筆していた。1850年以降は少年向けの読み物を書き始め、また少年向けの刊行物を編集しており、その少年小説の人気はディケンズに次ぐものだった[34]。彼は1859年、少年雑誌『*Kingston's Magazine for Boys*』を創刊、自身が執筆した実に教育的な文章も掲載していた。このほかに同誌では翻訳作品も掲載されており、キングストンの名が翻訳者として冠されてはいるものの、これらの作品の真の翻訳者は妻のアグネス・キンロック・キングストン(Agnes Kinloch Kingston、1824-1913)だったのである。アグネスはこうした雑誌の作品を翻訳したほか、ヴェルヌの作品も訳したが、翻訳者にはすべて夫キングストンの名が記されている[35]。アグネスが夫にかわって翻訳していたという事実は、1940年代にキングストン夫妻の日記が発見されるまで知られることはなかった。キングストンは130作あまりもの作品を執筆したが、晩年は借金と病に苦しみ、『鉄世界』の英訳本が出版された翌年の8月にこの世を去っている。キングストンの死後、当然ながら妻アグネスは夫の名で翻訳作品を出すことはできなくなる。出版社Sampson Lowはキングストンの妻が常に翻訳に携わっていたことを知ってはいたが、彼女自身の名前で翻訳を続けさせることは望まなかった。もしキングストンの死後の作品にその妻の名を翻訳者とした場合、読者がそれまでの作品の本当の翻訳者が誰か疑い出すのではないかと出版社が恐れたためである。このため、キングストンの妻は娘アグネス・ダンダス・キングストン(Agnes Dundas Kingston、1856-1886)の名を借りて、キングストンが存命中に彼女が着手していた『*The Steam House*』という作品の翻訳を出版するのだ[36]。このように、英訳本『*The Begum's Fortune*』の本当の翻訳者は書籍の上に記されたW. H. G. Kingstonではなく、Agnes Kinloch Kingstonなのである。だが、この女性についての研究は非常に少なく、彼女に音楽の才能があり、欧州美術館で芸術を学んでおり、フランス語とドイツ語が非常に流暢だったことしかわかっていない[37]。

キングストンの妻の英訳本は、森田思軒に翻訳され『鉄世界』となった。この翻訳作品は、森田思軒にとって非常に大きな意味を持つ。坪内逍遥は明治文壇の外国文学翻訳

---

33 Peter Schulman, "Introduction", xvii.

34 W. E. Marsden, "Rooting racism into the educational experience of childhood and youth in the nineteenth-and twentieth-centuries", *History of Education* 19.4 (1990), 333-353.

35 *Oxford Dictionary of National Biography*, s. v. "Kingston, William Henry Giles (1814-1880)". 〈http://www.oxforddnb.com/view/article/15629〉(26 Aug 2015).

36 Norman Wolcott, "The Victorian Translators of Verne : Mercier to Metcalfe".

37 Reverend M. R. Kingsford, *The Life, Work, and Influence of W. H. G. Kingston* (Toronto : Ryerson Press, 1947). Norman Wolcottより引用。

について語る中で、原著を再現するような翻訳ができる者3人を「三如来」――森田思軒を「英文如来」、森鴎外を「独文如来」(ドイツ語)、長谷川四迷を「魯文如来」(ロシア語)と称している[38]。だが、森田思軒の翻訳の道は、最初から順調だったわけではない。森田は『郵便報知新聞』における初の掲載で惨敗しており、その後「仏曼二学士の譚」(鉄世界)の翻訳で大きく方針を変え、同紙の大衆化路線に合わせた。これによって、翻訳者として高い評価が得られるようになったのである[39]。注意すべきなのは、「仏曼二学士の譚」の翻訳者名が「紅芍園主人」であって森田思軒ではないことである。『郵便報知新聞』のコラム「嘉坡通信報知叢談」(嘉坡はシンガポールの意)に掲載された作品の形式上の共通点は原作者名も翻訳者名も記載されておらず、よく使われているペンネームも用いられていない点である。一方、『郵便報知新聞』の他の翻訳小説はまさにこの逆で、一般的に作者名を記載したり、翻訳者がよく使うペンネームを使っている。桒原丈和はその原因として、1つ目として「嘉坡通信報知叢談」に作者が明記されているのは不自然だと考えられたのではないか。2つ目として読者に特定の翻訳者がいることを意識させたくなく、読者が「嘉坡通信報知叢談」を『郵便報知新聞』の全体的なシリーズとして見なしてほしかったのではないかという2点を指摘している。このため、作者、翻訳者が不明で、その後の研究者が研究するまで、その中に多くのヴェルヌの作品があることはわからなかった。小説の中にはその後単行本として発行された際に実際の翻訳者の氏名が付されたものもある[40]。だが、単行本発行後、森田思軒は『鉄世界』の序で、この本は友人の「紅芍園主人」が訳したもので、自分は少し手を加えただけだと記しつつ、奥付には森田文蔵が「譯者兼出版人」と書かれている。同じ状況は森田が翻訳した『瞽使者』でも見られ、彼はやはり翻訳者は自分ではなく「羊角山人」という別の人間だとしており、奥付には森田文蔵が「譯者兼發行人」と書かれている。したがって、「紅芍園主人」や「羊角山人」はいずれも森田思軒なのであると思われる[41]。

包天笑が日本語訳本を手にすることになったのは、日本に留学していた友人によるものである[42]。包訳の『鉄世界』の前言によると、この本は友人呉和士[43]が日本から戻った時に贈られたものだという。包天笑はここからその小説翻訳の人生が幕を開けたと

---

38 坪内逍遙「外国美文学の輸入」(『早稲田文学』第3号, 2010年2月). 秋山勇造「森田思軒」『埋もれた翻訳』(東京:新読書社, 1998), p.79より引用。

39 川戸道昭、榊原貴教(編)『図説翻訳文学総合事典第1巻・図録日本の翻訳文学・図説日本翻訳文学史』(東京:大空社, 2009), pp.122-123.

40 桒原丈和「嘉坡通信報知叢談論―メディアとしての小説」, pp.22-23.

41 富田仁によると、森田思軒が用いた別号には、紅勺園主人、大塊生、獨醒子、羊角山人があるという。富田仁『フランス小説移入考』(東京:東京書籍, 1981), pp.54-55.

42 包天笑の回顧録での記述によると、彼は『迦因小伝』の他に2冊の日本の小説を翻訳しており、1冊は『三千里尋親記』、もう1冊は『鉄世界』で、いずれも日本に留学した友人が古本屋で買って帰国時に彼に贈ったものだという。包天笑『釧影楼回憶録(上)』, pp.205-206.

43 呉和士は蘇州出身者で、包天笑、王薇伯、蘇曼殊などの同志が集まり「呉中公学」を発足したり、包天笑と共に『呉郡白話報』の編集を担当したこともある。諸家瑜「『呉郡白話報』和創辦人王薇伯」、蘇州政協、2013年6月28日(閲覧日2015年8月17日)〈http://www.zx.suzhou.gov.cn/szzx/infodetail/?infoid=c5549881-088b-434c-85fc-bed5823f802d&categoryNum=004007002〉.

言ってもよい。それからの数年間、包が教育小説の翻訳を手がけるようになるのだが、それ以前に訳した小説はすべて当時のいわゆる「科学小説」であった。例えば1904年の『秘密使者』、『千年後之世界』、『無名之英雄』、1905年の「法螺先生譚」と「法螺先生続譚」などが挙げられよう。そして1908年、包は自らの科学小説「世界末日記」と「空中戦争未来記」を『月月小説』に発表するのである。包天笑は、商務院書館の『教育雑誌』に教育小説を翻訳し始めた後も、1910年の「新造人術」、1911年の『無線電話』、1912年『結核菌物語』、1914年『発明家』、「顕微鏡」、「心電站」など科学小説の翻訳や創作を継続させていた。ここから見ると、包天笑が教育小説を翻訳する以前に力を入れていたのは科学小説の翻訳であり、教育小説の翻訳を始めた後も、科学小説に対する情熱は変わらなかったことがわかる。『鉄世界』は彼を科学小説創作へと導くことになる翻訳作品であり、その重要性は言を俟たない。後世、晩清の科学小説の翻訳が論じられる時には、包天笑の「『鉄世界』訳余贅言」の「科學小説者、文明世界之先導也。世有不喜科學書、而未有不喜科學小説者。則其輸入文明思想，　最為敏捷。（科学小説というものは、文明世界の先導である。科学の書を喜ばない者はいても、科学小説を好まない者はいない。すなわちその文明思想を輸入するのに、最も早い方法だ）」[44]という部分がよく引用されており、この書籍が中国科学小説の発展に啓蒙の功があったことが見て取れる。

ここからは日本語訳と中国語訳の翻訳の特徴に注目していきたい。英訳本については先行研究で論じられている問題点を上述したが、日中翻訳を検討すべき他の理由が3つある。第1点として、日本語訳本では多くのページ数が削除されており、森田思軒自身も日本語訳本の「凡例三則」で多くの箇所を勝手に切り取ってしまったため、これが単純な翻訳とは言えない、そこで「述」を入れて「訳述」という言葉で自分の翻訳を呼称すると述べていることである[45]。訳本の内容の差が大きければ大きいほど、検討すべき箇所は多くなる。日本語訳本の削除の部分からは、森田思軒個人の科学小説に対する想像と定義を見出すことが可能となるのである。第2点として、科学小説は西洋からの新しいジャンルであり、日本語翻訳者と中国語翻訳者がいかに新しいジャンルで表現された新しい世界や物事を扱ったのか観察することで、日本と中国がいかに西洋の新しい概念を受容したのかを見出せることが挙げられる。第3に、包天笑の教育小説の翻訳ストラテジーはすでに多くの研究があるが、科学小説の翻訳に似たようなスタイルが見出されるか否かも検討すべきだということである。

44 包天笑「訳余贅言」，p.1.

45 森田文藏「凡例三則」『鉄世界』（東京：集成社，1887），pp.1-2.

4 翻訳の特徴

『鉄世界』は、フランスの医学者「佐善」とドイツの化学者「忍毗」がそれぞれ自分の理想の町を作る物語である。2人はふとしたきっかけで莫大な遺産を受け継ぎ、佐善はこの金を使ってアメリカの西海岸に長寿村を建設、忍毗も同じくアメリカの西海岸に錬鉄村を建設するが、忍毗はひたすら新型爆弾を製造し、フランス人の長寿村を消滅させようとする。主人公の馬克は佐善にとって息子同然の若者で、「約翰」という偽名で錬鉄村に入り込み、忍毗の計画を知った後なんとか村を出て長寿村の住人に知らせに行く。忍毗の初めての攻撃の爆弾は、計算間違いのため長寿村に命中しない。2回目の攻撃の時には、液体炭酸が漏れて忍毗が瞬間的に凍死してしまう。この時、忍毗はまさに書き物をしていたところで、最後の書名も名前の前半の「忍」の字しか書けず非業の死を遂げる。物語の結末は悪はやはり正義を倒すことができず、長寿村が難を逃れるというものである。フランスの原著や英訳本と対照すると、日本語訳本と中国語訳本は佐善の子供に関するエピソードがなくなっている。なぜなら森田思軒は、馬克と佐善の娘の恋愛は本筋に無関係だと考えて恋愛の部分を削除してしまい、佐善の息子を防御委員の乙透にすり替えているからである。この脇役は物語の終わりで登場し、馬克とともに錬鉄村に忍び込み事実を探るのみである。英訳本は前半で佐善の子Ottoと主人公のMaxの友情、そして2人が一緒にいるエピソードがあるが、これが日本語訳ではすべて削除され、物語の最後の佐善の娘と馬克の結びつきも合わせて削除されてしまっているのである。

森田思軒が一見、枝葉のようなこれらのエピソードを削除したことは、森田が科学小説が表現する新世界、新発明、新しい視点を重視する一方で、小説が本来持つ隠蔽された意味を見逃していることを示している。フランスの原著や英訳本の結末では、もともと結婚と家庭の美しいイメージが表現されており、忍毗が密室で一人寂しく死んでいくのと対照をなしている。これは忍毗がこの戦いで長寿村に敗北しただけでなく、人生という戦場でも結局は敗北者で、彼がイデオロギー上、失敗していることを示しているのだが[46]、こうした意味合いは森田思軒がそれにまつわるエピソードを削除したことで読者に伝わることはない。1887年10月22日『朝野新聞』の評論でも、「小女小男の情話」を削除してしまったことで、「一巻を通読し徒に木石の槎牙たるを見るのミ(ママ)にて紅紫の間に点綴する無きを憾むる」と指摘されている[47]。ヴェルヌはドイツの科学者忍毗の失敗で、モダニズムの負の部分を取り上げ、それまで科学の進歩に楽観的だった見方を変えているのに、翻訳でアジアにもたらされた際には、日本が憧れる強固な武力と文明科学こそが森田思軒の関心を寄せるポイントにすり替わってしまったのである。思軒は序において、ヴェルヌの小説を読むと19世紀の文明の進歩が感じられると述べている[48]。

---

46 Peter Schulman, “Notes”, *The Begum's Millions*. by Jules Verne, trans. Standford L. Luce, ed. Arthur B. Evans (Middletown, CT : Wesleyan University Press, 2005), 216.

47 藤元直樹「明治ヴェルヌ評判記 —『鉄世界』編」, p.114.

48 森田文藏「鉄世界序」『鉄世界』(東京：集成社, 1887), p.10.

ヴェルヌは科学小説で哲学や政治問題を浮き上がらせたが、森田思軒の目には科学しか映らなかったのである。

エピソードの削除は、日本の明治時代や中国の晩清によく見られる方法である。これまで、包天笑はよく『馨児就学記』ではイタリアの原作に比べ削除部分が多過ぎて任意に書き換えていると批判されてきた。しかし包の翻訳にとっての原文である日本語訳と照らし合わせてみれば、大部分の削除や書き換えは日本語の翻訳者杉谷代水がしたものであることは明らかである。『鉄世界』も似たような状況で、削除や書き換えの内容は実は森田思軒が行ったもので、包天笑によるものではない。包天笑は基本的にはそのソーステクストに極めて忠実なのである。また筆者のこれまでの研究で、包天笑の教育小説の翻訳にもいくつかの特色があることがわかっている。例えば、原文の漢字のそのままの使用、現地化、四字熟語の使用、蘇州方言の音による専門名詞の音訳、序言の内容を日本語訳本から訳すことなどの特色である。このほか、イデオロギー的には、彼が保守的な古い道徳の価値観にあることが明らかである。このうちいくつかの特徴がすでに『鉄世界』の訳本に見て取れる。以下ではこれについて論じていきたい。まず最初の特徴は四文字言葉である。物語の冒頭の第一段落からこの四文字言葉の特色が明らかである。

> 夕陽明媚，萬木蔚蔥，門外繞以鐵欄，雜花怒放，闌内細草如氈，風景閒雅可愛。中有斗室，明窗淨几，簾幕斜捲。[49]

『鉄世界』は包天笑のごく初期の翻訳作品で、そこで使われている文体は主に文語文である。包天笑は、まず翻訳を始め、その後創作をするようになったが、当時の状況について「白話小説不甚為讀者所歡迎，還是以文言為貴，這不免受了林譯小説薫染(白話小説はあまり読者に人気がなく、やはり文語文が尊ばれており、これは林訳の小説による影響が否定できない)」[50]と述べている。このため、包天笑の文体も古典的な文語文よりのものとなっている。四文字熟語を多用した文語文的な書き方は、特に風景描写でよく登場し、極めて典型的な中国伝統の小説の書き方を踏襲したものとなっている。こうした部分の風景描写は日本語訳にはなく、包天笑が追加したものである。陳平原は、晩清の新小説家のこうした形式的な書き方を批判し、新小説の風景、物事の描写には実に失望した、既存の決まり文句が多用されていると述べている。辛亥革命後に出現した大量の文語文の長編小説も、古書から写した「宋元山水」――つまり決まり文句に満ちている。陳平原は「山是紙山，水是墨水，全無生趣可言，誦之不知今世何世(山は紙の山、水は墨汁、いずれも生き生きしたものはなく、一体いつの世かわからない)」[51]とも述べる。胡適も

49 包天笑(訳) 鉄世界(上海：文明書局，1908)，p.1.
50 包天笑『釧影楼回憶録(上)』，p.208.
51 陳平原『中国小説叙事模式的転変』(北京：北京大学出版社，2006)，p.114.

中国小説に風景の描写技術が欠けているとし、「一到了寫景的地方，　駢文詩詞裡的許多成語便自然湧上來，擠上來，擺脱也擺脱不開，趕也趕不去(風景描写の部分では、駢文詩詞の多くの成語が自然にわきあがり、迫ってきて、払いのけても離れず、追い出そうとしても追い出せない)」[52]と指摘するのである。包天笑がこの段落に加えた風景描写は、典型的な決まり文句をはめ込んだものなのである。

2つ目の特徴は蘇州方言による音訳である。包天笑は蘇州の出身で、ペンネーム「呉門天笑生」は彼の蘇州(旧称呉門)への思い入れを表している。筆者は以前『児童修身之感情』の重訳史を考察した際、包天笑が蘇州方言で人名や地名を音訳しており、林紓が福州方言で人名や地名を音訳したのと同工異曲であると指摘したが[53]、今回『鉄世界』の訳文を考察し、あらためてこの推論が証明される形となった。主役の馬克を例にすれば、その氏名は英訳本ではMax Bruckmannで、森田思軒訳では「馬克・貌刺萬」、読み仮名は「マクスブラヅクマン」[54]となっている。包天笑は「馬克浦士孟」と訳しており、この中の「孟」という字は蘇州方言で「man」と発音し、現在の普通話の「meng」という発音とは異なっており、蘇州方言の発音がカタカナの最後の2音「マン」に近いことは明らかである。また「Sedam」という地名の場合、日本語訳本はカタカナで「セダン」とされているが、包天笑は「瑞敦」としている。この「瑞」という字は蘇州方言で「ze」と発音し、普通話の「rui」とは異なる。このため、「セダン」の「セ」(se)を「瑞」(ze)と訳すのは、明らかに蘇州方言の影響によるものなのである。

3つ目の特徴は序の翻訳である。包天笑の「訳余贅言」では5つの点が挙げられているが、このうち2つ目と3つ目は森田思軒の「鉄世界序」を参考にした上でアレンジしたものであって、彼自身が書いた内容ではない。そこには「今日英國學士有海底潛行船之製矣(今日のイギリスの学者が海底を潜る船を製造した)」、「巴黎學士有駕空中飛船而横渡大西洋者矣(パリの学者が空中を飛ぶ船を操縦し大西洋を横断した)」、「英國陸軍省有買美人之毒彈者矣(イギリスの陸軍がアメリカ人から毒爆弾を購入した)」、「比利時之皇后有安坐宮中而聽法國大劇場之歌曲者矣(ベルギーの皇后が宮殿にいながらにしてフランス大劇場の歌曲を聴いた)」など、ヨーロッパ文明の進歩が次々と挙げられている。この本のイデオロギーについて包天笑は「是書之成在德法戰爭以後，　其意欲大快法人之心，　而書中描寫日耳曼人刻薄嚴冷之風不遺餘力，　怨毒之於人亦甚矣哉。(この書物は、ドイツ・フランス戦争以後、フランス人の心を快くしようとしたもので、書中にはジャーマン人の酷薄で厳冷な性質が余すところなく書かれており、怨毒が人へ対する影響が甚だしい)」[55]とある。これは森田思軒の「此著盖シ普佛之戰ノ後ニ成リ。其意大ニ佛國人ノ心ヲ快ニスルニ在リ。其の曼國人ノ刻薄嚴冷ノ風ヲ模スルニ至子ハ殊ニ怨毒ノ深キヲ見ル。」[56]とい

52 胡適「老残遊記序」『劉鶚及老残遊記資料』，劉德隆，朱禧，劉德平編(成都：四川人民出版社，1984)，p.384.
53 陳宏淑「『馨児就学記』前一章：『児童修身之感情的転訳史』」(『翻訳学研究集刊』第17輯，2014.6)，pp.1-21.
54 森田文藏(訳)『鉄世界』(東京：集成社，1887)，p.15.
55 包天笑「訳余贅言」，pp.1-2.
56 森田文藏「鉄世界序」，pp.10-11.

う部分を訳したものであることが明らかである。他人の序を自らの序の一部にすれば、これが翻訳者包天笑の独自の見解であると読者に勘違いさせかねないであろう。実際、范苓はこの序について、これは「中国科学小説の先駆者が、中国科学小説が社会を変革する重要な意味を理解したものである」[57]と説明するなど、序に書かれた内容が包天笑自身の見解だと勘違いしているのである。

上述のいくつかの特徴のほか、ヴェルヌの科学小説そのものの特殊性も考えなければならない。まず科学名詞の翻訳が挙げられる。科学小説であるなら、物語には当然多くの新しい名詞が登場し、新発明や新しい事象などが表現されることになる。作中に登場する種々の新名詞は、森田思軒、包天笑とも文中に注を差し込む形で注釈を補充し、読者の理解を助けている。これは森田思軒が本文中に注をはさんだために、包天笑も当然それを訳出しているということである。例えば、森田思軒は「鶴頸」という言葉に「重き物を上げ下しする機械」[58]という注を文中に差し込み、包天笑は「上下重物之機械」(重い物を上下する機械)[59]と訳している。その形も単行の叙述に上下を括弧でくくるという形もよく似ている。だが、森田思軒の挟み注のほか、包天笑は自分でも挟み注を加えている。例えば「熊手」を「一種器械名」(一種の機械名)[60]、「坩堝」「即土罐以融金類者」(金属類を熔かす土缶のようなもの)[61]、「懸輿」は「礦中所乗而升降者」(坑道の中で乗って上がり下がりするもの)[62]、「電話機」「即德律風」(すなわちテレフォン)[63]などがある。これら包天笑が追加した注釈は小文字で2行書きにされており、森田思軒の単行の挟み注とは異なる形式が用いられている。包天笑が文中に挟む注釈を2行にする方法は、アレーニ(GilulioAleni, 1582-1649)が「訳述」した『天主降生言行紀略』でも見られる。包天笑の訳注の書き方は、明朝の翻訳者の伝統を引き継いだもの、いわば中国文学の注釈の伝統に沿ったものである可能性もある。ここからは、包天笑が科学的な名詞を翻訳する際、日本語訳本に沿って注をつけているほか、その他に中国読者が理解できないかもしれない新名詞と自らが判断した場合にも注釈をつけ、この場合は2行の小文字で差し込む形を用い、森田思軒の単行の形と区別していることがわかる。こうしたやり方は、彼が翻訳の際に読者の存在を意識し、かつ自覚的に科学の新知識を導入する責任を負っていたことを示しているのである。

だが、新名詞に特に敏感だったせいか、包天笑は普通名詞を新名詞だと勘違いしている部分もある。例えば、日本語訳本に、1人の少年が鉱場の馬のそばで眠っている描写

---

57 范苓「明治「科学小説熱」與晩清翻訳：『海底旅行』中日訳本分析」(『大連海事大学学報』(社会科学版)第8巻第3期, 2009.6), p.123.

58 森田文藏(訳)『鉄世界』, p.45.

59 包天笑(訳)『鉄世界』, p.30.

60 同前注, p.27.

61 同前注, p.29.

62 同前注, p.38.

63 同前注, p.79.

がある。日本語訳では「夜ハ又た荷馬の邊に眠むり之を守る」[64]とある。この中の「荷馬」とは荷物を運ぶ馬のことだが、包天笑は文中に「鑛中所用一種器械之名」(坑道で用いる一種の機械の名称)[65]と注を入れている。これは包天笑が坑道を知らず、坑道で荷馬を運搬のために使っていたことが想像できなかったためかもしれない。また、新名詞に不慣れなためか、包天笑の訳した名詞には前後で一致していないことがある。日本語訳本では坑道に入る装具として「呼吸器」[66]があるが、包天笑は「吸氣筩」「吸氣筒」「呼吸器」[67]と3種の訳語を当てているのである。偶然にも、森田思軒にも知識不足で誤訳している箇所がある。英訳本では佐善の長寿村が「The scene lies in the United States, to the south of Oregon, ten leagues from the shores of the Pacific.」[68]、つまりアメリカのオレゴンにあると書かれている。だが、森田思軒はこの位置について「合衆國の西岸にて海濱を距ること十里許りオレゴン河の南」[69]としており、オレゴンを河として訳している。このため包天笑もこれにつられて誤訳し「合衆國之西岸, 距海濱十里許, 當亞蘭宮河之南」(合衆国の西海岸、海辺から10里あまりのオレゴン河の南にある)[70]としているのである。

『鉄世界』の科学小説としてのもう一つの特色は、多くの単位が登場し、物語の機械の大きさや建物の概観を描写している点である。西洋の単位が東洋にもたらされる場合、日本や中国で慣用的に用いられている単位に転換しなければ、読者はその長さ、重さ、大きさなどを実感することはできないと予想される。日本語訳本では、森田思軒は長さの単位――「碼」(yard)と「呎」(feet)を扱う時、特に混乱が見られる。例えば砲弾の射程距離の2万ヤードを「四里二十町」[71]としており、距離としては似たようなものになっているが、家が道路から「十碼」というところを森田は「十尺」[72]と訳している。「十碼」なら「三十尺」が正しい。また、最も小さい鋳物場の長さは約「四百五十呎」で、森田思軒は「八十間」[73]としており、これは正確な数字である七十五間とかなり近い。しかし一方で、坑道の地底の深さ「一千五百呎」を、森田は「六十間」[74]と訳している。この場合の正確な数字は「両百五十一間」であり、面積の単位の誤差はさらに大きなものとなっている。長寿村の地価は0ドルから1ヘクタール180ドルに値上がりしたが、森田は1坪180円[75]と訳

64 森田文藏(訳)『鉄世界』, p.54.
65 包天笑(訳)『鉄世界』, p.34.
66 森田文藏(訳)『鉄世界』, pp.59-62.
67 包天笑(訳)『鉄世界』, pp.38-39.
68 Jules Verne, *The Begum's Fortune*, trans. W. H. G. Kingston (Philadelphia : J. B. Lippincott, 1979), 63.
69 森田文藏(訳)『鉄世界』, p.29.
70 包天笑(訳)『鉄世界』, p.20.
71 森田文藏(訳)『鉄世界』, p.86.
72 同前注, p.123.
73 同前注, p.45.
74 同前注, p.54.
75 同前注, p.160.

しており、1ヘクタール＝3000坪から考えれば、この価格の差はあまりに大きい。これは森田思軒が単位の換算に対しあまり気を使っていないことを示しているのではないだろうか。

同じく包天笑も単位の換算が不正確だという問題がある。日本語でよく使われていた「間」と「町」という単位を、包は時には直接用いているのである。例えば前述の砲弾の射程距離が「四里二十町」[76]という部分を、包天笑はそのまま「四里二十町」としており、中国語読者が理解可能かどうかを考えていない。時には、また中国語読者がよく知っている単位に訳すこともあるが、包は単位を中国のものに変えても数字を換算しない。例えば前述の坑道の深さが地下約「六十間」という部分を包天笑は「六十丈」と訳している[77]。だが「六十間」はおよそ「三十丈」に等しい。他の例としては、「数十間」を「数十丈」、「六間許」を「六七丈許」、「両百間四方の内」を「二百丈立方以内」としているなどがある。だが、さらに「二十間」を「十二丈」、「二間余」を「十余丈」と訳しているところなどもある。包天笑は漢字をそのまま使うのを好むだけでなく、単位の翻訳でも日本の単位をそのまま使ったり、中国の単位にしても数字をそのまま使ったり、あるいは換算をしてもその結果が正しくないこともある。これは包天笑が単位換算をすることができなかったのか、あるいは真剣に取り組まず最も楽な方法で数字や外国の単位を直接使ったと考えられるのではないだろうか。無論、森田思軒にしろ包天笑にしろ、科学小説というこの特殊なジャンルに取り組む際、数字と単位の正確性の大切さについては重視しないか、能力がないか、意識しなかった可能性がある。これはまたこの2人の翻訳者が当時、正確さを求める科学的態度を欠いていたことをも示しているのである。

5 おわりに

全体的には『鉄世界』の重訳史の研究から特異な点を4点、見出すことができる。第一に、作者が真の作者ではなく、翻訳者が真の翻訳者ではないこと。第二に科学小説が特に森田思軒と包天笑の興味を引いていること。第三に、模倣やそのまま利用することが包天笑の最も明らかな翻訳の特徴であること。そして第四に、森田思軒の周密訳と包天笑の削除・書き換えのスタイルがまだ現れていないことである。まず第一の点から見ると、この物語の最初の作者はPaschal Grousettであるが、ヴェルヌがリライトする過程でスポンサーであるPierre-Jules Hetzelが多くの意見を出しており[78]、このためフランス語の原著の真の作者をヴェルヌとは言い切れない。英訳本の翻訳者キングストンも真の翻訳者ではなく、実際はその妻が訳したものである。日本語翻訳の翻訳者「紅芍園

76 包天笑(訳)『鉄世界』, p.52.
77 同前注, p.35.
78 Peter Schulman, “Introduction.”, xiii-xxxix.

主人」も実は森田思軒である。「思軒居士」は故意に「紅芍園主人」は自分の友人であると強調しているが、本当の翻訳者は本名森田文蔵の森田思軒なのである。この興味深い現象は、翻訳研究が原著と作者を中心とした流れを打破しつつあることに呼応している。いわゆる原著や作者がかなり不確定な場合、ソーステクストの翻訳者が真の翻訳者でない時、翻訳の忠実性はすでに翻訳研究が注目するポイントではなくなるのである。

第二の点はというと、森田思軒も包天笑も『鉄世界』を翻訳する前にすでに別の翻訳作品を発表している。森田思軒の初の翻訳は「印度太子舎摩の物語」で、これは散々に批判されている[79]。つまり『鉄世界』は彼が「報知叢談」の啓蒙的性格に合わせ、執筆方針を変えた後の再挑戦の翻訳作品なのである[80]。一方、包天笑の初の翻訳作品である『迦因小傳』は主に楊紫麟が口述した内容によるもので、包天笑はただ中国語を整えただけである。この2人の翻訳者が科学小説『鉄世界』を実力を試す出発点としたのは、あるいは物語の中の強烈な科学性と理想性に引き付けられたのか、また彼らはこれが読者を引き付ける新鮮なモチーフになり、今後の翻訳人生の最良のスタートになると考えたのではないか。だが、結局2人は翻訳を生業にし始めたばかりであったため、地理や科学の新知識に面した時、あるいは種々の単位を扱う際、まだ不慣れな点が見出せる。これはまた第三の点につながる。翻訳能力がまだそれほどない包天笑が最もよく使った翻訳ストラテジーは、日本語訳文の内容を参考にした上でアレンジするか、あるいはそのまま利用するというものであった。これには序や専門用語、単位、数字なども含まれる。包天笑は、他人の序を自分の意見として使うことがどれほど不適切なことか、また訳出した単位――長さ、面積、価格などが正確かどうか、理にかなっているかなどを意識していなかった。これらは、逆に言えばこの当時の包天笑が、そのソーステクストに極めて忠実であったことを反映している。このため、第四の点で示したいのは、包天笑は翻訳研究史上ではよく勝手に削除や書きかえをすると研究者に指摘されてきたが、実際にはその大部分の翻訳は包天笑が依拠した日本語訳に忠実であり、『鉄世界』ももちろんそうだったということだ。森田思軒はもとより周密体で著名だが、『鉄世界』の段階での翻訳作品はまだ逐語訳や周密体と称することはできない。2人の翻訳者ともこの作品での翻訳は過去の翻訳史研究者が与えた評価には合致していないのである。

『鉄世界』は森田思軒と包天笑の科学小説の道に入る入り口となっただけでなく、その後も一連の影響を産んでいる。1897年、川上音二郎は森田思軒の『鉄世界』を原作として、この物語を演劇にしている[81]。1908年には韓国でも『鉄世界』が出版された。翻訳者は李海朝で、この『鉄世界』は近代以降、1907年の『海底旅行奇譚』に続いて韓国で翻訳された2つ目の科学小説となるのである。崔瑞娟の研究の目録によると、李海朝の韓国語

79 川戸道昭、榊原貴教(編)『図説翻訳文学総合事典第1巻・図録日本の翻訳文学・図説日本翻訳文学史』, p.123.

80 藤井淑禎の研究によると、「金驢譚」(不語軒主人訳)の翻訳は「仏曼二學士の譚」より前とされるが、「金驢譚」は娯楽性の高い作品で、「報知叢談」本来の啓蒙的性格と懸け離れている。藤井淑禎「森田思軒の出発 ―「嘉坡通信報知叢談」試論」。(『国語と国文学』第54巻第4号, 1977.4), pp.30-31.

81 藤元直樹「明治ヴェルヌ評判記 ―『鉄世界』編」, p.125.

版の『鉄世界』は、包天笑の中国語訳本から翻訳されたものと思われる。この他、高陽氏不才子は1909年、『小説時報』に書名がわずか一字違いの『電世界』を発表している。林健群[82]はこの書名からわかるようにこの作品は『鉄世界』からヒントを得て創作された科学小説だと指摘している。こうした『鉄世界』のその後の影響は、小説が演劇化された後どのようにローカリゼーションされたのか、包天笑の中国語訳本が李海朝に韓国語に翻訳された後どのように変化したのか、あるいは『電世界』がどのように『鉄世界』の影響を受けているかなどについて、実際にテクストを読解し比較対象をしなければ答えが見つからないものである。これは本研究が今後続けていく方向となる。これらのさらなる発展や変化を知ることで『鉄世界』の重訳史をより豊かで完全なものにしていきたい。

参考文献

秋山勇造(1998)「森田思軒」『埋もれた翻訳』東京：新読書社. Akiyama, Yūzō(1998). Morita shiken. In *Umoreta Honyaku*. Tokyo：Shindokushosha, 79-113.

藤井淑禎(1977)「森田思軒の出発――「嘉坡通信報知叢談」試論――」『国語と国文学』第54巻第4号, pp.27-42. Fujii, Hidetada(1977). Morita Shiken no Shuppatsu：'Shingapōru Tsūshin HōchiSōdan' Shiron. *Kokugo to Kokubungaku vol.54(4)*, 27-42.

藤元直樹(2010)「明治ヴェルヌ評判記――『鉄世界』編」『Excelsior!』第4期, pp.111-125. Fujimoto, Naoki(2010). Meiji Verne Hyōbanki："Tetsusekai" Hen. *Excelsior! vol.4*, 111-125.

川戸道昭・榊原貴教編(2009)『図説翻訳文学総合事典第1巻・図録日本の翻訳文学・図説日本翻訳文学史』東京：大空社. Kawado, Michiaki and Sakakibara, Takanori eds.(2009). *Zusetsu Honyakubungaku Sōgō Jiten volume 1, Zuroku Nihon no Honyakubungaku, Zusetsu Nihon Honyakubungakushi*. Tokyo：Ōzorasha.

桒原丈和(2009)「「嘉坡通信報知叢談」論――メディアとしての小説」『文学・芸術・文化』第21巻第1号, pp.17-36. Kuwabara, Takekazu(2009). Shingapōru Tsūshin Hōchi Sōdan Ron Media toshiteno Shōsetsu. *Bungaku, Geijyutsu, Bunka vol.21(1)*, 17-36.

森田文藏(1887)「凡例三則」『鐵世界』東京：集成社, p.1. Morita, Bunzō(1887). HanreiSansoku. In *Tetsusekai*. Tokyo：Shūseisha, 1.

森田文藏(1887)「鐵世界序」『鐵世界』東京：集成社, pp.1-11. Morita, Bunzō(1887). Tetsusekai Jyo. In *Tetsusekai*. Tokyo：Shūseisha, 1-11.

森田文藏(1887)『鐵世界』,東京：集成社. Morita, Bunzō(1887). *Tetsusekai*. Tokyo：Shūseisha.

中里理子(1993)「森田思軒の周密文体の特徴――「探偵ユーベル」に見る文章表現上の特色――」『学校法人佐藤栄学園埼玉短期大学紀要』第2号, pp.69-77. Nakazato, Michiko(1993). Morita Shiken no Shūmitsubuntai no Tokuchō："Tantei Yūberu" ni Miru Bunshō Hyōgenjyō no Tokushoku. *Gakkōhōjin Satōe Gakuen Saitama Tankidaigaku Kiyō, vol.2*, 69-77.

高橋修(2005)「森田思軒訳『探偵ユーベル』の終り――「探偵」小説というあり方をめぐって――」『上智大学国文学論集』第38号, pp.1-17. Takahashi, Osamu(2005). Morita Shiken Yaku "Tantei Yūberu" no Owari：Tantei Shōsetsu toiu Arikata wo Megutte. *Jōjidaigaku Kokubungaku Ronshū, vol.38*, 1-17.

富田仁(1981)『フランス小説移入考』, 東京：東京書籍. Tomita, Hitoshi(1981). *Furansushōsetsu Inyūkō*. Tokyo：Tokyoshoseki.

82 林健群：『晩清科幻小説研究1904-1911』(国立中正大学中国文学所, 修士論文, 未出版, 1997).

柳田泉(1935)『明治初期の飜譯文学』, 東京：松柏館. Yanagida, Izumi(1935). *Meiji Shoki no Honyakubungaku*. Tokyo：Shōhakukan.

Butcher, William(1994). Journey to the Centre of the Text：On Translating Verne. *Babel volume 40, issue 3*, 131-136.

Dunae, Patric A.(1980). Boy's Literature and the Idea of Empire, 1870-1914. *Victorian Studies volume 24, issue 1*, 105-121.

Evans, Arthur B.(2005). A bibliography of Jules Verne's English Translations. *Science Fiction Studies volume 32, issue 1*, 105-141.

Evans, Arthur B.(2005). Jules Verne's English Translations. *Science Fiction Studies volume 32, issue 1*, 80-104.

Kingsford, M. R. *The Life, Work, and Influence of W. H. G. Kingston* (Toronto: Ryerson Press, 1947).

Lee, D.(2006). The Catastrophic Imaginary of the Paris Commune in Jules Verne's Les 500 Millions de la Bēgum. *Neophilologus volume 90, issue 4*, 535-553.

Marsden, W. E.(1990). Rooting racism into the educational experience of childhood and youth in the nineteenth- and twentieth-centuries. *History of Education volume 19, issue 4*, 333-353.

Martin, Charles-Noël(1978). *La Vie et l'oeuvre de Jules Verne*. Paris：Michel de L'Ormeraie.

Miller, Walter James(2008-2009). As Verne Smiles. *Verniana volume 1*, 1-8.Web.2014.9.6. 〈http://www.verniana.org〉

Oxford Dictionary of National Biography(2004). Kingston, William Henry Giles (1814-1880). Web. 2015.8.26. 〈http://www.oxforddnb.com/view/article/15629〉

Schulman, Peter(2005). A Note on the Translation. In *The Begum's Millions*. Written by Jules Verne, translated by Standford L. Luce, edited by Arthur B. Evans. Middletown：Wesleyan University Press, ix-xi.

Schulman, Peter(2005). Introduction. In*The Begum's Millions*. Written by Jules Verne, translated by Standford L. Luce, edited by Arthur B. Evans. Middletown：Wesleyan University Press, xiii-xxxix.

Schulman, Peter(2005). Notes. In *The Begum's Millions*. Written by Jules Verne, translated by Standford L. Luce, edited by Arthur B. Evans. Middletown：Wesleyan University Press, 197-220.

Unwin, Timothy(2005). *Jules Verne：Journeys in Writing*. Liverpool, UK：Liverpool University Press.

Verne, Jules(1979). *The Begum's Fortune*. Translated by W. H. G. Kingston. Philadelphia：J. B. Lippincott.

Wolcott, Norman(2005). The Victorian Translators of Verne：Mercier to Metcalfe. Lecture, the Jules Verne Mondial.Web. 2015.8.27. 〈http://www.ibiblio.org/pub/docs/books/sherwood/The%20Victorian%20Translators%20of%20Verne.htm〉

包天笑(1908)「譯餘贅言」『鐵世界』上海：文明書局, p.1. Bao T. (1908). Yiyuzhuiyan. In *Tieshijie*. Shanghai：Wenmingshuju, 1.

包天笑(1990)『釧影樓回憶錄(上)』, 台北：龍文出版社. Bao T. (1990). *ChuanyinglouHuiyilu*, Taibei：Longwenchubanshe.

包天笑訳(1908)『鐵世界』, 上海：文明書局. Bao T. (1908) (Trans.).*Tieshijie*. Shanghai：Wenmingshuju.

陳宏淑(2014)「≪馨兒就學記≫前一章――≪兒童修身之感情≫的轉譯史」『翻譯學研究集刊』第17輯, pp.1-21. Chen H. (2014). *Xinerjiuxueji* Qianyizhang：*Ertongxiushenzhiganqing* De Zhuanyishi. *Fanyixueyanjiujikan, vol.17*, 1-21.

陳明哲(2006)『凡爾納科幻小説中文譯本研究』. 國立臺灣師範大學翻譯研究所, 碩士論文. Chen M. (2006). *Fanerna Kehuanxiaoshuo Zhongwenyibenyanjiu*, Guolitaiwanshifandaxue Fanyiyanjiusuo, Shuoshilunwen.

陳平原(1997)『二十世紀中國小説史・第一卷』, 北京：北京大學出版社. Chen P. (1997). *Ershishiji Zhongguoxiaoshuoshi Diyijuan*, Beijing：Beijingdaxuechubanshe.

陳平原(2006)『中國小説敘事模式的轉變』, 北京：北京大學出版社. Chen P. (2006). Zhongguoxiaoshuo Xushimoshi De Zhuanbian, Beijing：Beijingdaxuechubanshe.

范苓(2009)「明治「科學小説熱」與晚清翻譯――≪海底旅行≫中日譯本分析」『大連海事大學學報』(社會科學版)第

8卷第3期, pp.119-123. Fan L. (2009). Mingzhi "Kexuexiaoshuore" Yu Wanqingfanyi：*Haidiluxing Zhongriyibenfenxi. Dalian Haishidaxuexuebao (Shehuikexueban) volume 8, issue 3*, 119-123.

胡適(1984)「老殘遊記序」劉德隆, 朱禧, 劉德平編『劉鶚及老殘遊記資料』成都：四川人民出版社, pp.383-388. Hu S. (1984). Laocanyoujixu. In *Liue Ji Laocanyoujiziliao*. edited by Liu Deyong, Zhuxi, and Liu Deping. Chengdu：Sichuanrenminchubanshe.

林健群(1997)『晚清科幻小説研究 1904-1911』國立中正大學中國文學所, 碩士論文. Lin, J. (1997). *Wanqing KehuanxiaoshuoYanjiu 1904-1911*, Guoli Zhongzhengdaxue Zhongguowenxuesuo, Shuoshilunwen.

崔瑞娟(2012)『中韓近代科學小説比較研究——以凡爾納的≪海底旅行≫和≪鐵世界≫為中心』山東大學韓國學院亞非語言文學所, 碩士論文. Cui R.(2012). *Zhonghan Jindai Kexuexiaoshuo Bijiaoyanjiu：Yi Fanerna De Haidiluxing He Tieshijie Weizhongxin*, Shandongdaxue Hanguoxueyuan Yafeiyuyanwenxuesuo, Shuoshilunwen.

王晶晶(2012)『新舊之間——包天笑的文學創作與文學活動研究』上海師範大學人文與傳播學院中國現當代文學科, 博士論文. Wang, J. (2012). *Xinjiuzhijian：Baotianxiao De Wenxuechuangzuo Yu Wenxuehuodong Yanjiu*, Shanghai Shifandaxue Renwen Yu Chuanbo Xueyuan Zhongguo Xiandangdai Wenxueke, Boshilunwen.

諸家瑜(2013年6月28日作成)≪呉郡白話報≫和創辦人王薇伯, 蘇州政協. 2015年8月17日閲覧 Zhu Jiayu (2013.6.28) Wujunbaihuabao He Chuangbanren Wangweibo, Suzhouzhengxie. 2015.8.17. 〈http://www.zx.suzhou.gov.cn/szzx/infodetail/?infoid=c5549881-088b-434c-85fc-bed5823f802d&categoryNum=004007002〉

陳宏淑 Hung-Shu CHEN

(台湾)台北市立大学副教授。中国晩清翻訳史、教育小説重訳史の研究。"A Hybrid Translation from Two Source Texts：The In-Betweenness of a Homeless Orphan."(『編譯論叢』第8巻第2期, 台北：国家教育研究院, 2015)、"Chinese Whispers：A Story Translated from Italian to English to Japanese and, Finally, to Chinese."(『東亜観念史集刊』第8期, 台北：政大出版社, 2015)、「翻譯「教師」：日系教育小説中受到雙重文化影響的教師典範」(『中國文哲研究集刊』第46期, 台北：中央研究院中国文哲研究所, 2015)など。